
白い公園で

椎野 千洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い公園で

【著者名】

NZマーク

N6098C

【作者名】

椎野 千洋

【あらすじ】

いつまでも降り注ぐ雪、そこは思つ出の公園で、僕は彼女に会いに行く。

静寂に包まれた街には小さな公園があつて、そこには壊れかけのシーソーとか錆びきつた「ブランコ」が設置されていた。そしてその公園には大きな桜の木があるんだ。春になるとその桜がとても綺麗で、涼やかな風がそこを流れるとまるで粉雪のように花びらが舞う。彼女が一番好きだった場所なんだ。

そんな場所で僕は彼女と別れた。

僕は彼女の事を愛していましたし、その気持ちは今でも変わらない。きっとこれからも変わらないと思つ。

でも彼女は僕の所から去ってしまった。原因がわからなかつたけど、僕には彼女が幸せそうに見えていた。でも今思えば僕の単なる思い違いだったのかもしれない。最近になつてそう思つよくなつた。

そんな風に思うよくなつたからかもしれないけど、僕は春になる前の冬の季節、久しぶりに彼女と別れたその公園へと足を運んでみた。

公園は相変わらず寂れた感じの場所で、春には美しい桜の木も今季節では花も葉も纏つていないので、灰色の空に突き刺さらんと枯れ枝を伸ばすばかりだった。それでも真っ白な雪の絨毯が敷いてあるし、空からも綿毛のような雪が美しく舞っていたため、それはそれで綺麗だと思えた。

僕は桜の根元まで行き、そこを背もたれにして雪の上に腰を下ろ

した。空を見上げると枝の間を雪が滑り落ちてきている。美しいけど寂しい。そんな気持ちにさせる景色だった。

「やっぱり来たのね。貴方つてそういう人よ

突然背後から彼女の声がした。透明な、それでいて物悲しい声だつた。だが別に僕は驚きはしない。ここは彼女が好きだった場所なのだ。彼女が居ても不思議ではない。

「うん。本当は来ないつもりだったんだけど、どうしても君の事を忘れないんだ。それに僕もこの場所は好きだ」「

僕は久しぶりに聞いた彼女の声がうれしかった。だからかもしけないけど、彼女も少し笑っているように思えた。

「でももう私達は一緒に居られないのよ。それは貴方にもわかっているでしょ？」「

「わかっているさ、でも僕は君が好きだったんだ。今でもそうだよ。もし君が僕を求めるならいつだって僕は君の元へ」「

「貴方が好きよ。いつまでも一緒にいたい……でも駄目。私にはわかつていたのよ、貴方なら私と一緒に居てくれるだろうって。だから別れるしかなかつた」

僕は取り戻したかった。彼女は幸せではなかつた。そう思つたからこの場所に来たのだが、それでも彼女と過ごした場所、そして時間、温もり、それが恋しかつた。

「僕にはどうする事も出来なかつたのか？　君の苦しみを和らげて

はあげられなかつたのか？ 僕はいろいろ考えたよ。そしてもう疲れてしまつたんだ」

それから僕と彼女は黙つたまま、積もりゆく雪と静寂の中を過ごした。体は冬の冷氣に体温を奪われ、徐々に雪の創り出す景色へ同化していくようであつた。

「見て、この景色をどう思つ？ とても悲しくて、とても静かで、そしてとても美しいわ。でもね、もう少ししたらこの白い雪の絨毯は美しい草花に変わつていくし、この寂しい桜の木だつて美しい花びらを舞わせるのよ？ 私はそんな変化がとても好きなの。だから貴方にむここの景色のように変わつていつてほしい。私は貴方も大好きだから……」

彼女はそれ以上何も言葉を発しなかつた。僕は体に積もつた雪と共に沈みゆく心が少しだけ暖かくなつた気がしていた。

そして僕は桜の根元から立ち上がり、もつ話してはくれないだろうと思つたが、彼女に言つた。

「君は怒るかもしれないけど、やつぱつまた僕はこの場所に来るよ。今度はこの白い雪が桜の花びらに変わる頃にね」

その問いかけに、やはり彼女は答えてはくれなかつた。

僕は永遠と思えるほど雪を降り続けさせる灰色の空を眺め、そして歩き出した。

彼女の言つとおり僕は変われるのだろうか。やがて厳しい冬の季節が過ぎ去り、新しい息吹が吹く春を迎えて、僕の心中で降り

積もる雪は溶けていくのだろうか。僕にはまだそれが訪れるという自信が無かつた。僕の中にはいつでも彼女が居る。その温もりを捨て去る事はとても難しいよつて思えてならない。

彼女はもう居ない。居ないのだ。そう思えば思つほど僕は彼女の影を追う。それが死という形であつたとしても、彼女が死に居る場所に辿り着けなかつたとしても。

僕は公園を出る前に足を止め、もう一度彼女を見ようと振り返つてみた。だがそこに彼女は居ない。あるのは花も葉も無い惨めな桜の木だけだつた。

ただ、その桜の木と周りを舞つ雪が相まって、僕には少しだけ春の美しい桜の木が花びらを舞い散らせていくよつて見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6098c/>

白い公園で

2010年10月12日06時10分発行